

物語歌と物語歌集 下

「風葉和歌集」からみた物語「在明の別」

大 槻 修

前稿の要旨 「風葉和歌集」(文永八年―一二七一)の編纂という大事業に当って、皇太后姞子を中心としたサロンが、第一次撰集の作業を担当、大凡二百を超える物語群から千五百首に近い秀歌(現存「風葉集」が十八巻本なることは惜しまれる)を選び出し、詞書・詠人名(最終官職名に統一)等を整備し、「古今和歌集」の部立に準じた配列をしたであろうことは、第二次作業で爲子、阿佛尼等の助力を得た爲家がその採配を振るつたであろうとする樋口芳麻呂氏の論をも含めて、大凡は首肯されるであろう。ただ物語「在明の別」から抜き出された二十一首の詞書等を、改めて作品そのものの中に据え戻して検討した場合、また「風葉集」各巻内における採歌物語の配列の具合から見ても、いわゆる勅撰集の編纂とは違った「物語歌による物語歌集」の然るべき編集基準があるべきではなかったらうか。まず「在明の別」巻一から撰歌された風葉所載歌九首の検討から始めることにした。以下は巻一の検討を終り、その続稿である。

六

物語「在明の別」巻二の梗概を示す。表向き「亡き右大将の子息」として成長した左大臣は、自分の出世の秘密を知らず、

女院を恋慕する。それは「あやにくな宿世」のなせるわざであ

った。肉親愛で、かつての「愛児」に接する女院を、「亡父の妹君」として恋するが、心満たされぬ左大臣は、情熱と嫉妬の女

—中務卿宮北の方と契りをもつ。また時の内大臣(三位中将のころ中務卿宮北の方と縁を持った)の隠し子四条の上と、加えて時の右大臣(中務卿宮北の方の兄)の大君とも契りを交わす。自分を裏切つて、内大臣・右大臣それぞれの姫君を娶つた左大臣に対して、いまは物の怪と化した中務卿宮北の方が、二人の女性にのり移つて、凄絶な恨みの言辞をなげつける。卷一の趣向豊かな構成から、卷二は純文学的な、「愛と宿世」に翻弄される宿命的な人生の苦惱が展開されてゆく。

以上、卷二は墨付七一丁、計三〇首の歌の中から「風葉和歌集」に五首が詞書等を付して所収されている。ここにその五首を、改めて物語に記載されている順序に再録する。

(J)(4) あるましきことを思ひけるころよみ待りける

有明別左大臣

身をくたく恋の行へをたつぬればあふを限のはてたにもなし

(卷十一、恋一) 824

(K)(10) 思ひむすほゝる、こと有てはしつかたになかむるにを

りしりかほにこたふるをきのうは風もけにあやしき程

なりければ 有明の別の中務卿みこの北方

あた人の心の秋のみえしより我身にとまるをきのうはかせ

(卷十五、恋五) 1094

(L)(11) とひとりこちけるをたちき、てふとさしよりて

左大臣

下萩のわれにしなひく風ならばあたる秋のこまはしらせし

(同) 1095

(M)(9) 女のもとよりかへりてあしたにつかはしける

有明の別の左大臣

袖のうちに我たましひやまとふらんかへりていける心ちこそ

せぬ

(卷十二、恋二) 928

(N)(15) 女院ひさしくいらせ給はさりける頃奉らせ給ひける

有明の別のみかとの御うた

まちかぬる月の光のおそければ雲の庭の秋そかひなき

(卷十六、雑一) 1224

中野莊次・藤井隆氏「増訂校本風葉和歌集」『昭45・1月、友山文庫による。歌の右に付した校異は、物語本文による。

「風葉集」諸本間の異同は省略。上段(J)(K)(L)は物語記載の順。下段(4)(11)は「風葉集」部立による順を示す。卷一に九首あり。本稿(出)と形式同じ。

(J)の歌は、物語卷の二の冒歌部分にあつて、左大臣(男装の頃の女院と対の上との間に、表向き、生まれたとする男児)が、

梗概で述べたように、女院恋しさに悶々とする日々の心情を歌ったものである。(J)歌のあと、

うちむかひきこえぬひもなく、をのつからをとこ女のけちめ
はかりの御つ、ましきたになく、まことくしきみちく
ことまで、かたへはの給はせをしふる御心は、か、るみをお
そろしくかたしけなき物に思ひならひ給える御心には、まこ
とにみをかへ、あらぬよならては、かく思ふてふことをたに、
うち出つへきものとはかけても思よらねと (三ウ)

と、「なべての世すさまじき心地のみ」するのだが、「風葉集」所載に当って、「あるまじきことを思ひけるころ」とだけ詞書に示しては、いみじくも松尾駿氏のいわれるように、「高貴な方の御配偶又は人妻を恋うて苦しんだのであろうか」の程度しか推察がつかない。物語「在明の別」を担当した女房は、責任を持つて作品を通説し、秀歌を撰んだのであろうから、当然ながら、巻一における表向き、亡き右大将の子息たる左大臣が、巻一、三では主人公としてクロース・アップし、「源氏物語」の骨組にも似て、亡き父を恋ひ慕う（光源氏は亡き母であったが）彼がいま女院として美貌のはまれ高い亡父の妹君に情熱を捧げる（光源氏は、義理の母たる藤壺であった。「在明の別」は趣向に取り込んだ男装事件をうまくトリックに使って、「一人二役の身変り」

を用いた。よって女院こそかつての男装の姫君つまり表向き左大臣の父右大将であったこと、巻一の梗概に記した）日々の苦しみこそ、本作品の正統派物語としての見逃し得ぬ。生命であるだろうことは、十二分に理解していただと思われる。なればこそ(J)歌を撰んだ理由も首肯し得るといふものであるが、それでは詞書の表現の仕方があまりにも杜撰ではなかつたろうか。「あるまじきこと」とだけでは、せっかく(J)歌を選び出した意味がほとんど消滅するといつても過言ではない。(J)歌の前後を「風葉集」で見ると、「いはや」物語の兵衛佐として、

我ならぬ人にもかくやつれなきと心みかてら身をやかへまし
(巻十一、恋一) 823

および「女のすくせしらす」物語から右大臣の歌として、

宜羅殿女御いまたまふり侍らさりけるころつかはしける
すて、はやをしからぬ身のなからへてつらさにたえむおなし
命を (同) 825

とあるが、ともに散佚物語なので、事の詳細は不明というほかはない。

(K)歌は、時の内大臣を恨む中務卿宮北の方の歌である。かつて三位中将だった頃、人妻である彼女との間に不義の娘を持った身ながら、いま内大臣に昇進、むしろ青春の情熱に任せた恋

の日々を反省しがちで、彼女との縁を切れたまま——。「思ひむすほゝる、こと有て」といふ北の方の心情は、かかる長い人生史の上に立つて初めて理解し得る性質のものである。

たまたま友人の語つた源氏入道の隠穩地での艶なる想い出話に、興味を覚えた左大臣は、こつそり粉れ込み、そこに美しい母子の姿を見出した。十五、六歳ほどの姫君の傍に、その母とも思えぬ美貌の中務卿宮北の方。物思いに沈むその風情（その折に口ずさむのが(K)歌）に好き心を動かし左大臣は声をかけ（それが(L)歌に当る）、ついもの粉れから一夜を明かしてしまふ。それは、女院への想いの果たされぬ彼が、その情熱の吐け口を求めた不幸な出逢いでもあった。ということとは(K)歌の「あの人」が内大臣のことで、(K)(L)歌は恋人同志の贈答歌ではなく、この時点では初めての出逢いに過ぎない。確かに(L)歌の詞書に「ふとさしよりて」とあり、(K)歌に対して「われにしなひく風ならば」とあるので、すでに相思相愛の仲であつたとは思われぬが、実は、この(K)(L)両歌の記された巻二の両者の出逢いが、以後の中務卿宮北の方の運命を大きく変えてゆく原因となつてゐる。かかる意味で、彼女の人生を悲劇に彩る贈答の(K)(L)歌としては、今すこし詞書の示し方がなかつたのだろうか。

(K)歌の前を「風葉歌」で当ると、「源氏物語」から「六条院御

うた」として、

もの、たよりに御らんせられたりける女の有さまさたまりにけるにたかやかなるをきにつけてつかはさせ給ける

ほのかにものきはの萩をむすはすは露のかことを何にかけましかつて、「萩」にまつわる配列となつてゐる。また(L)歌のあとには「よその思ひ」の物語から「登花殿女御」の歌として、

みかと御心かはりよのつねならてとしへぬる秋の夕をなかくて風にとまらぬ露もうらやましういとひかかねければ

きえねかし袖の涙の露とたにうき身をはらふ秋風もかなとあり、散佚物語ゆえに深い事情を内容面から推察したいが、要するに(K)歌の「心の秋のみとしより」(L)歌の「あたる秋のこま」などから、「秋の夕」袖の涙の露「秋風」へと配列の順序を決めたようである。

ともあれ、思わぬ粉れから中務卿宮北の方と契つた左大臣は(K)(L)歌による出逢いの末、情愛のままさがままに違ふ瀬を重ねたが、妻の挙動に不審の念を抱いた中務卿宮が強行手段で二人の仲を割こうと画策する。本心は女院を恋う左大臣であつてみれば、一時の道すがらの情欲でもあつた以上、やがて足も遠の

くようになり……。その凄惨な彼女の末路は卷三の梗概を参照していただくとして、物語全巻を通じて、王朝女性らしからぬ恋に生き恋に死んだ、中務卿宮北の方の、最悪の運命的出逢いを描くシーンが(K)歌であった点、この両歌を撰出した力量は認め得るものの、「在明の別」担当女房の、詞書表記に関する今一步の配慮のなさを惜しむのである。

七

(K)歌を発端として契りを交した左大臣と中務卿宮北の方との、その後の展開にかかわるのが(M)歌である。思わぬ体験をした左大臣は、帰邸後すぐに後朝の歌を彼女に送るべく、

いつしか御す、りをしすり、こまやかなる御文のけしきを、
ほのかにみる中将(私注)左大臣に慕情をよせる侍女)そ、そ
こはかとなくうちなげかる、しみふかきいろ／＼のかみを
えりいたさる、いろもにはひもなを心ことなり

(一五ウ)

と本文があつて、次に(M)歌が登場する。当然ながら詞書の「女」は中務卿宮北の方のことであり、二人の愛情関係にかかわる恋の表現として、「女」と書いて然るべきでもあろうが、(K)歌に、両者の贈答歌があつてみれば、(K)歌と(M)歌との関係が「女」だけでは不明になってしまう。物語本文に据え直してみても、初

めて「女のもとより」が、中務卿宮北の方のもとから左大臣が帰邸して——と理解できる訳である。なお物語によると、(M)歌のすぐあとに、

人はいさ我たましひはあくかれぬまつこのくれの心さはきに

(一六オ)

と、中務卿宮北の方の返歌が記されている。(M)歌の前に配列された歌を「風葉集」で見ると、「河きり」物語の内大臣の歌として、

中宮の新中納言にもいひそめていて侍るとてよめる
たくひなき心はかりをと、め置て又あふまてのしるへともせ
む

(卷十二、恋二) 927

が掲げられている。「河きり」物語も散佚の部数にはいるので、詳細なる筋書の展開は不明ながら、いわゆる「後朝の歌」というワクの中に並べられたものと覚しい。また(M)歌のあとをみると、「あさちか露」物語の入道関白の歌として、詞書はなく

たましひはあかぬよとにと、め置てあるにもあらずくらす
けふ哉

(同) 929

とだけ記されている。「あさちか露」物語は末尾欠葉部分を有しながら弧本として現存する貴重な作品である。右の歌を本文に据えて物語展開を紹介すると、初恋の人——齋宮と引き離された二位中将(のちの入道関白)が、節分のある年の師走、方違え

のため清水に近い兵衛大夫の屋敷で、美貌の女君と契る。これが「あさちか露」物語のヒロインだが、堀邸後どのようにして彼女と交渉を続けようかと苦悩する二位中将が心なくさめに手習いする折の書きとめた歌、それが「たましひは—」である。つまり、右の歌は、いわゆる「後朝の文」に添えられた歌ではなく、その点、(M)歌の詞書を流用することは許されない。

最後に(N)歌に触れる。折から中宮(女院が男装の右大将であった頃、表向きわが娘として可愛がったものの、実は表向き北の方であった対の上が、義兄に犯された結果の不義の子)は懐妊の身。帝は琴の音談義の中で、女院が常に兄である自分をさしおいて、弟の春宮に秘伝を教える傾向のあるのを不満として、また女院の参内が久しく途絶えている淋しさから、乳母をして奉らせたのが(N)歌である。実は、女院の立場からみると、自分が男装の右大将として、二度の奇璫を招いた程の楽の音を伝え得る人物は、今の春宮しか居ない。今の帝は確かに朱雀院との間に設けた皇子に違いないが、その妃に当る中宮は、前述した通り、女院にとって明朗ならざる思い出にまつわる人であった。当然ながら春宮こそわが秘術を教授するに足る素性のすぐれた存在であったわけだが、以上のような物語展開における骨組の面白さは、(N)歌の詞書からは不明というほかはない。なお(N)歌

の前を「風葉集」によって調べると、「あひすみくるしき」物語の源大納言の三君の歌として、

おなしよ女ともたちとかたらひて

かけとめてあるへくもなき世の中のとかにすめるよはの月
かな
(卷十六、維一) 1222

と、続いて左大弁女が「かへし」として、

すみのほる月の影たになかりせはうき世をいかて我すこさまし
(同) 1223

の歌が掲載されている。内大臣との恋に悩む女性(三君)を中心として、女性の側に立って書かれたと覚しい物語⁽⁵⁾だが、「あひすみくるしき」なる作品も散佚してしまっている。また(N)歌のあとは、散佚物語「ひちぬいはま」の朱雀院の歌として、

女二のみこ承香殿にすみ給ひけるに前のきくををらせ
給ひて開白に御子のかけものに給はすとて

わきてをる心もふかし九重にうつろひはてよしらさくの花
(同) 1225

とある。やはり詳細なる筋書の展開は不明というほかはないものの、(N)歌との配列順序を考える時に改めて留意した形跡は認められぬであろう。

以上、物語「在明の別」巻二から「風葉集」に撰出された五

首の詞書等を、物語本文の中に据え直して検討してきたが、巻一の場合と同じく、ほぼ全体的に、詞書の書かれ方に、不十分な点が多く、物語全体の視野から、よく該当場面にふさわしく詞書を付け得た例は皆無といってよい。加えてその五首が、勅撰集の部立に準じて、各巻に四散させられ、他の物語からの所収歌の中に混在させられたことは、万が一「在明の別」の散佚化した場合、二層のこと物語そのものを理解させることを不可能にしてしまう恐れ十分であった。

この拙稿も、いま「在明の別」が孤本ながら實在する有難さから、逐一「風葉集」所載歌を物語の中に据え直して検討し得るわけで、現在、完全に散佚し終っておれば、松尾氏の検討されたごとく、風葉所載の詞書、詠人名等から復原せざるを得ない。「風葉集」編纂時、二百余りの物語が、五百年、千年後にかゝりの数にのぼる散佚（実に九割の物語が散佚してしまった）をきたすであろうことは、十分に予知されていたと覚しく、そこに、重ねていうようであるが、物語歌集を作成する時の編集方針、具体的な表記方法など、慎重な配慮を、より一層のこと求めたかったのである。

八

最後に「在明の別」巻三の梗概を記す。内大臣の姫君四条の

上と右大臣の大君（ともに左大臣の北の方）とに、物の怪と化してとりついた中務卿宮北の方は、調伏された晚ついに狂死した。嫉妬の炎にその身を焼き尽くすと同時に、恋に生き愛に生き抜こうとした壮烈な生涯であった。一方、かつて三位中将であった頃、対の上に生ませた女兒が今は中宮の身。公然と親子の名乗りができぬ内大臣は、色好みの青春を悔いて淋しい死を迎える。さて院の四十の賀を祝う宴、東宮と合奏する女院の前に、雲の棧（かけはし）を伝って七人の天女が舞い降りて、花の宴を女院に贈る。それは物語に三度描かれる楽の音の奇想の、第三番目に出てくる華麗な場面。やがて太政大臣の逝去、関白の死と淋しい夕映えのなかで、女院を慕う左大臣の熱情だけは、なお冷めやらぬまま、さてそゆく末は……、物語は終るともなく、その幕を閉じている。

以上、巻三は墨付五〇丁、計一七首の歌から「風葉集」に七首（詞書中の一首を含む）が選ばれている。例によって、物語に記載されている順序に再録する。

(0) (2) 中宮をよそのことに聞たてまつりけるにこ、ちかきり
になりてしのひて奉りける 有明のわかれの内大臣
思ひおく君たに今は哀しれこの世にか、る中はありやと

（巻九、哀傷） 655

(P) (3) 御かへし

いかなりし此よのさきもたとられす思ひしる身そおき所なき

(同) 656

(Q) (10) 院の御賀に春宮の御笛の音雲るにすみのほりておもし

ろきに雲のけしきはり月の光まさりて楽のこまおな

ししらへにふきあはせたるに女院御ひはをひきすまさ

せ給へるに花の女七人雲のかけはしよりおりて一返ま

(R) (19) ひたるに春宮「をとめこか花の一えたと、めおけ末の

世までのかたみにもせん」とふかせ給へるにえたへぬ

にや花のかつら一ふさをりて女院の御袖のうへに奉る

とて 有明の別のあまつをとめ

この世にはいか、と、めん君とわれむかし手折し花の一えた

(巻十七、雑二) 1318

(S) (20) 御かへし 女院

花のかは忘れぬ袖にと、めおけなれし雲るにたちかへるまで

(同) 1319

(T) (1) 入道前関白太政大臣さかにてわつらひ侍けるに行幸あ

りて常行堂のみあかしの事なとおほせくたさせ給うて

よませ給ける 有明のわかれのみかとの御歌

すまの世を久しくてらせか、けおくけふのみゆきの法のとも

し火

(巻七、釈歌) 522

(U) (21) 入道前関白太政大臣のさかの家に行啓ありてかへらせ

給ふとてよませ給ける 有明の別の東宮

大る川るせきの浪よなれもきけれ世にすまは又かへりこん

(巻十八、雑三) 1333

まず(O)(P)の歌から検討してみよう。詞書「中宮をよそのこ

とに聞たてまつりけるに」がわからない。松尾氏も(O)(P)両歌に

ついて

ある女を恋ひ、その女も動かされぬでもなかつたらしいのに、

その女は召されて入内し、中宮となつてしまはれた。内大臣

は恐らくその失恋の傷手に再び起ち得ず、病を得て死の間際

に中宮にその悲しみを訴へたのであらう。

と想像されたが、当然ながらの推論であらう。改めて、物語本

文の中に両歌を据え戻してみると、内大臣と中宮とは実の父と

娘であった。梗概にも記した通り、内大臣はかつて三位中将で

あった頃、色好みの限りを尽くし、数多の女性と關係を重ねて

きた。かかる女性の中の一人、村の上(義理の兄妹に当る。承

図に示すごとく異母兄妹)が、すでに人妻である(夫は表向き

男装していた今の女院)をもかえりみず、強引に五月雨の夜に

犯した、その結果生まれてきたのが、今の中宮である。ふとした機会に、中宮が我が子であることを知った老残の身の内大臣は、まさか公然と親子の名乗りはできぬものの、死の床を前にして、せめて一言を……と、それは未練でもあった。事情に詳しい侍女を招き、中宮への歌を涙ながらに托す内大臣。その折の歌が実は(0)の「思ひおく——」なのである。

侍従の話を聞いた中宮は、自分自身を清塵潔白の身として、プライド高く生きてきたものを、かかる出生の秘密の存在に仰天し、返しの文案も浮かばぬままに、とり急ぎ書きとめたのが(P)歌であった。せめて死の前に親子の名乗りを間接的ながら達し得た内大臣は、幸せな死を迎えたわけだが、以後の中宮は悲惨であった。悲嘆のあまり里下りを決意し、出生の真実を知らせてくれなかった母対の尼の死を統いて迎えざるを得なかった。

なるほど(0)(P)歌を選んだ「在明の別」担当女房の心情は十二分に扱み取り得るが、それにしても、(0)歌の詞書があまりにも簡単にすぎて、後世に誤解を生むこととなった。述べてきたような内大臣と中宮との数奇な運命は、担当女房も物語を読みながら実感したはずであって、いま「風葉集」に所載するについて、書くべき詞書としては、(P)歌の場合をも含めて、より一層のこと慎重を期すべきではなかったか。なお(0)歌の前を「風葉集」で

見ると、「女す、み」物語から、帝と中宮との贈答歌となっている。

御こ、ちれいならずおほしめされけるに中宮に聞えさ

せ給ける

かきりあらむ今一とときの命をは君にと、むるこの世ともかな

(巻九、哀傷) 653

御かへし

をしむにはよらぬいのちを今はた、したふにたゆる此世とも

かな

(同) 654

をみると、明らかに死を予感した帝が中宮によせる慕情の歌であり、松尾氏が(0)(P)歌に寄せた前述の推論と同じ軌道にある。

一方、(P)歌のあとは、「やみのうつ、」物語から大納言更衣として、

やまひしてよわうなりにけるときしのひてをとこに申

侍りける

たのめてもこの世はよしやわたり河後のうきせをとほむ計そ

(同) 657

の歌がある。散佚物語なので筋書は不明であるが、大納言更衣と詞書にみえる「をとこ」とは、よもや「在明の別」の場合のような実の父娘ではあるまい。以上の配列から考えてみても、「在明の別」担当女房は、(0)(P)歌を選出するに当って、内大臣と中宮との関係を明白に示して、物語本文における哀傷の度合

いを、より鮮明にすべく、よりもっと詞書の書き方に配慮すべきではなかつたらうか。

(Q)(R)(S)の三首を一括して検討する。まず(Q)歌の詞書の長大なるに驚くが、「在明の別」物語は、平安後期の作品にふさわしく、樂の音による天変地異(奇瑞)が、三個所にわたって描かれてゐる。初め二回の奇瑞は、卷一に現われる。時に新年の行事が華やかに展開され、左大臣(卷三の終わりで太政大臣・准三后に昇る。女院男装時に表向き愛児として遇した左大臣とは別の人物)邸の臨時客で、女院(その時は男装していたので、右大将の身分であつた)は妙なる笛の音を雲居に響かせて奇瑞を招いた。晴れていた空が急に曇つて、稲妻がきらめき、いよいよの香りがあたり一面に吹き出すという様子に、一同はただ感嘆の涙をのこつたとある。かかる異変はすぐ帝の耳にはいり、宮中における二月の梅花の宴で、強く参内を求められた右大將は、重ねて奇瑞を招き、帝の御感を得るに至る。

ほしのひかりにか、やき、月のひかりまさりて、そらのひかりちかつく心ちす。かうはしきかせ、をと、のうへにみちて、しろきくもたなひきわたるに、うゑの御心ちいとおそろしくなりて、をと、のとしかくし給けんを、わかさいさめいひつるも、いとうたてうらみふか、らんと、あやしくゆ、しきに、

いそきやめさせ給つ。

(四〇オ)

と本文にある。つづいて卷三に描かれた第三の奇瑞は、本物語を彩る匠巻のシーン展開であつた。院の四十賀を祝う盛大な儀式が営まれ、その夜は華やかな管弦の宴が催された。東宮が吹きすます笛の音、その笛こそ、かつての左大臣邸における臨時客で、今の女院が奇瑞を招いたそれであつた。三月十四日の月おほろの空がにわかには晴れ、月光のもと雲の棧(かけし)が天上から降りてくる。女院が琵琶をとつて合奏すると、七人の天女が天つ領巾をなびかせながら棧の上を舞い降りてきて、そのうちの一人が花の鬘を手し、女院に歌をよみかけた。それが実は(Q)の歌であつた。

はな(本文ち)を御てにとらせ給ま、に、そ、ろにと、こはらぬ御ひわのねに、うつし心もかたへははしまさぬにや、た、そこはとなく (三〇オ)

口ずさまれたのが「御かへし」の(S)歌であつた。実は女院こそ、神の命によつて地上界に生を受け、神示による男装を義務づけられた身であつた。隱身の術という超能力を持つことも卷一の梗概で記したところだが、その清らかな魂の持ち主としても、「竹取物語」のかぐや姫的な人物造型がなされている。また卷三の本文によると、

さるは、あやしくむかしより、よのつねの人に、す、しるま
御にほひも、こよひのかせのにほひにおほしあはせらるゝ。

院は、ゆ、しくをそろしくそおほしあやふまるゝ。(三〇ウ)
と示されるように、この世の人ならざる香氣に不審の念を持つてきた院も、いま降下した天女の香りと、女院のそれとの一致に、「さては昔から、世の常の人に似ぬ女性であった」と合意したという。以上、(Q)(R)(S)歌を物語本文に据え戻して考えた場合、確かに(Q)歌の詞書はよく書けているといえよう。ただ東宮の歌(R)歌)を詞書の中に巻き込んでしまったので異例の長文になつてしまった。また(Q)歌と(S)歌との贈答からは、女院なる人物の異常さ(前述してきたような、神の啓示とか隠身の術だとか、また本性を見破られて帝と契つた折に、隠身の術は失われてしまったとか)に対する詳しい分析がむずかしい。いま一步「風葉集」編纂の工夫があつて然るべきであらう。なお松尾氏の「在明の別」復原に際して、「天人降下(?)事件」と項目分けされたこの部分の記述は、縦横に考察をめぐらせ、委曲を尽くしておられる。

(Q)歌の前を「風葉集」で当ってみると、「松浦宮物語」の華陽公主の歌として、

琴をひきはへりけるにいなつましきりにして雲のた、

すまひた、ならざりければ

いなつまのさやかにてらす雲の上に我思ふことは空にみゆらし

(卷十七、雜二) 1317

とあつて、同じく奇瑞を示し、(S)歌のあとは「いはてしのふ」物語の関白の歌から、

一条院にて女院内大臣ことひきあはせてあそひ給ひけ

るに笛ふきなとして月は入なんとしければ

音にかよふ秋のしらへの松の風月をも空にふきやと、めむ

(同) 1320

の一首を掲載している。要するに(Q)(R)(S)の三首を通じて、「在明の別」担当女房に望みたかったのは、天女と女院との歌のやりとりから当然わかるであらう女院の人物造型の異常さ、その異常さが物語全体とどのようにかかわっているのか、という点に関する詞書の書き方に、よりもっと配慮してほしかったということであらう。

九

「風葉集」所収の二十一首の内、部立の關係から最初に出てくるのが(T)歌であるが、物語展開としては卷三の終り、ひいては物語そのものの巻末に近く、死を迎えた太政大臣を見舞う人々に嵯峨野の悲しみを描き出したところ、それが(T)歌の本来の

存在場所である。帝からみれば太政大臣は母方の祖父に当るが、思えば男装その他で懐しくも辛い思い出を持つ女院が、死を迎えようとする父太政大臣に持つ感情よりは深からぬものがあつたと考えられ、それは通り一辺という言葉は不適當であるが、まずは祖父を見舞う孫の心情に準じようか。なお(T)歌は「風葉集」卷七、釈教の最末尾に位置しており、その前は、「あまものしほひ」物語の大僧正の歌として、

あつまのかたに修行し侍けるに頼義朝臣かせめけんこ
ろもかほのたちに思ふ心ありてそとはたてなんとし
すくはんと思ふちかひをたておけはうへも仏のすかたなりける

(卷七、釈教) 521

とある。「あまものしほひ」物語は散佚しているが小本喬氏の復元を参照されるべく、拙稿の趣旨からいう「風葉集」の部立配列の上からは特に記すことはない。ついで(U)歌について触れよう。

帝につづいて東宮も太政大臣の病床を見舞う。末っ子が可愛いの例にもれず、太政大臣は孫の帝に対する以上に、末孫の東宮(帝の弟に当る)に愛情を寄せていた。

かたへはをいの御、おなしことにや、いまはた、こくらくの
むかへはなちては、まつことなきを、猶いかてあすの行啓ま

てとの給はする、心きたなし。されと、ひと夜のあくる、ほとなけれは、いつしかわたりをはします。うゑのくちをしくをはしますならねと、なをこの御ひかりは、たくひなきにそ、またさまかはり、御めをとろく。これはいますこしゆくすゑの御まつり事、いまの御心をきてまてをしへきこえさせ給。

(四二ウ)

と、死を前にしながら滋愛の深い太政大臣を前にして、一夜の看病を求めた東宮だが、あえて帰ることを要請する祖父を前に、返りみがちに嵯峨野を去る東宮の歌、それが(U)歌である。ただ(T)歌と異なつて、これは「風葉集」卷十八、雑三に入れられている。いま(U)歌の前を「風葉集」で見ると、「女のすくせしらす」物語から、第三の御門御歌として、

仁和の御時のせり河の行幸のゑを御らんして左のおほ
いまうち君にの給はせける

せり川のためぬなかれになくたつに古き跡をも尋ねてしかな
(卷十八、雑三) 1331

御かへし

左大臣

せり川の古きなかれを尋てもちとせの後は君そつくへき

(同) 1332

の贈答がなされている。やはり散佚物語なので、仁和二年の光

孝天皇の芹河行幸という史実は判明するものの、その絵を見た

第三の帝なる人物と左大臣との歌のやりとりが、「女のすくせしらす」物語にどうかかわるのかは不明というはかばかしい。ただ(U)歌のように、死の床に就いている太政大臣を孫に当たる東宮が涙ながらに見舞ったあと、立ち去りがたく口にしたものではあるまい。また(T)歌と比較してみると、(T)歌の場合は詞書に「入道前関白太政大臣さかにてわつらひ侍るに」とか「常行堂のみあかしの事」とかいう語があり、歌そのものにも「すまの世を」

「法のともし火」などの語があるので、(T)歌は(T)歌なりに物語本文に据え戻さずとも、見舞いの情景は想像し得よう。しかし(U)歌だけを「風葉集」巻十八、雑三の中で検討する場合、(T)歌のすぐあとに東宮が同じ条件で太政大臣を見舞った帰りの歌とは判別つけがたい。片や巻七、釈教に配列され、片や巻十八、雑三に位置づけられ、本来は物語本文の中で並んでいる二首の歌がバラバラに遠ざけられてしまった。なお(U)歌のあとは、「二子の宮」物語から、中納言の歌として、

冷泉院に行幸ありける時ともに中将にて青海波まひて
おなしく正三位ゆるされて侍りけるに殿の中将す、み
て中納言になりにはいひつかはしける

もろともにのほりし物を位山などこのたひはさそはさりけん

とあって、これは「在明の別」における(T)(U)歌と全く条件の違った場面描写である。あえていえば(U)歌もむしろ(T)歌と並べて釈教の部に入れるべきではなかったらうか。

以上、「在明の別」巻三に関して、「風葉集」所収の七首を検討してきたが、巻一・二における場合と同じく、個々の詞書の書かれ方が、物語全体と有機的にかかわり合っているとはいえず、むしろ(O)歌における「中宮をよそのことに」といった詞書が、内大臣と中宮との関係を誤解させ易く、また(Q)(S)両歌から推察し得る女院の前世の有様、その人物造型の複雑かつ異常性を、その詞書からは見抜き得ない。さらにいえば(T)(U)の両首が、本来は物語本文の中でほぼ並んで登場しているものを、巻七と巻十八に分離され、かつ詞書の書かれ方の違いもあって、理解をさまたげてしまったといえよう。

いま「在明の別」が現存し得て、初めて巻三からの七首の風葉所載歌を正當に理解、鑑賞し得たのであり、やはり物語歌を撰んで物語歌集を編むという一つの行為に、勅撰集、私家集等とはまた違った条件を考えざるを得ないのである。

結語

考えてみれば、収集し得る限りの物語二百余から秀歌千四百

(同) 1334

余首を選ぶという発想は壮大かつ革新的なものだったといえよう。勅撰集、私撰集など、いわゆる「歌集」はあっても、物語の中から名歌をもつて「物語歌集」を編纂するということは、文永八年（一二七二）の「風葉和歌集」において初めて、しかも皇太后皇子の命による公的な性格を持って誕生した。第一次作業で結集した皇子サロンの女房連中は、物語の収集、異本群の処理、分担等、それぞれ初の大事業に大いなる情熱を燃やしたことは当然のことであつたらう。

だが、初めての作業なるがゆえに、幾多の障害に悩まされたであろうことも推察できる。皇太后の権威を背に、物語の収集は想像するより容易であつたかも知れないが、秘蔵その他の事情から止むを得ず割愛せざるを得ぬ作品もあつたらう。また撰集の対象とすべき物語と、作品そのものの質から、当然ながら除外される作品と、その峻別の仕方にも種々の議論を重ねたことと思われる。ただ、問題は収集し、対象として選んだ物語群のそれぞれが、異本の校合という作業を必要とした場合はいかであつたか。王朝ラヴ・ロマンスの物語が栄えた平安最盛期から二百五十年余の後の文永八年となれば、同一作品に異本の続出したであろうことは容易に推察される。「秀歌を選び出す」という大命題に忠実であればあるほど、原作に一番正しい「底

本」の選定に神経を使わざるを得ない。

一体だれがどの作品を分担するのか。女房集団という社会なればこそ一層のこと嫉妬・羨望の渦巻く陰湿なムードの内、大作・小品等々、その分担と指名は困難を極めたに違いない。また「源氏物語」ほどの大作・長編を、果たして一人の女房が担当し得たであろうか。数人の女房の分担なれば、巻々の長短および全編に対する個々のウエイトの差などを考えるとき、事よどきように分担・指名は簡単ではあるまい。

いま仮りに「在明の別」から二十一首を選出（「風葉集」巻十九・二十にいかほど入首していたことか）した女房は、その作品が七百年の後に果たして存在し得るか、断片となり果てるか、場合によっては完全に散佚し果てるか、その予測を立てたことであろうか。万が一、「在明の別」が散佚し果てた場合、二十一首の選歌に詞書を作成し、「物語歌集」の中に散在せしめたことが、功罪なかばするのたとえのように、かえって後世に思わぬ障害を残す面があつたであろうことに思いを致したのであろうか。いま、小野小町の歌、和泉式部の歌など、個人のプライベートはともかくとして、それは一首一首が一つの名歌として独立体をなし、人々に深い感銘なり、新しい息吹きを感じしめる体の「もの」を持っている。だが、物語歌の場合、どうあがいて

も、「物語」という一つのワク、「物語」としての一つの筋書展開という制限を脱し得ない面が強いであろう。拙稿(上・下)で述べてきた二十一首の歌の一つ一つは、「在明の別」という物語作品の、連続した流れの中にならばめられた歌々であり、全編読了の感動の中でこそ、改めてその歌の良さが反芻され、その歌の意義を認め得る体のものであった。

添えられた詞書からは全く理解できない歌の味わいを、改めて物語の中に据え戻して、初めてわかった、という事例を、すでに数多く示してきたが、さらに尾を引くことは、その二十一首を、「古今集」の部立に準じて、バラバラに巻々の中に配分してしまうことの是非であろう。ここに二十一首の歌が、物語の中に登場してくる順序に配列され、より一層のこと詳細かつ長文の詞書が添えられ、かつ物語そのものもセットになっておれば、万全を期した編纂態度ではなかつたらうか。つまり、春・夏・秋・冬…と、全二十巻の「風葉集」の部立の中に散在せしめられた「在明の別」選歌二十一首のそれぞれが、不備な詞書を添えられて弧立し、配列されている。ある一首の歌の前に出てくる他の物語からの秀歌、また後に出てくる他の物語から出てくる他の物語からの秀歌と、以上、三首の歌々の相互の関連性も、単に「鳥の声」とか「月の夜」とか、単純な理由による配列にすぎず、要する

に部立という一つの規則の中に、歌々がバラまかれた点について、当時いろいろの疑惑が出なかつたのであろうか。そうして現代、こうした秀歌撰出の対象となつた二百余の物語の内、九割方の作品は散佚し果ててしまつたのである。

ここに「物語歌集の編纂」という大事業を思う時、勅撰集に準じた編纂態度は、当然そうあるべき當時の方針ではあつたらうが、改めて振り返るとき、「物語歌はそのすべてが物語という一つの連続体のワクの中から、果たして独立し得るか」という根元の問題を見つめる必要があつたように思われる。万人衆知の名歌ならば、いまその物語本文を机上にせずとも、抜き出されたその歌一首から、自動的に、瞬間的に物語の中に据え戻して、その情趣を味わい得ようが、二百を超える作品から千四百余首という量では、果たして即座の頭脳回転が無理なうできたのであろうか。確かに和歌というものが人生に密着し、宮廷サロンという、現代よりは遙かに限られた範囲にのみ愛好された物語享受の形態から、「物語歌の作者は即読者である」ということも考えられるが、それにしても物語および採歌の数や量が余りに多い。

考えてみると、事典編纂について、部類別・分野別大事典を作るか、一挙に全項目を五十音図引きの事典にするか——の決

断に似たところがないでもない。「明石」(アカシ)という一つの項目にたとえと、分野別ならば「文学」「行政」「水産」……と別冊刊行することによって、編集は割合に容易であろう。それを五十音図引きに一括した場合、「明石のタコ」「水族館」「子午線」「明石市勢」そのほかは「光源氏が明石入道のもとに通った道」まで、まるで五目飯のように混在することになる。

樋口氏のいわれる第一次、第二次の慎重な撰集作業はまことに姑子サロンの実力をいかなく發揮して行われたのであろうが、ここに「風葉集」に収められた「在明の別」の歌二十一首を、詞書ともども改めて物語の中に据え戻して検討したところ、「物語歌集」という特殊な性格の歌集に関する編纂のあり方に、いささかの難点あることを記し置きたく思う。

注(1) 引用文は、拙著「在明の別の研究」(昭44・10、桜楓社)による。

- (2) 松尾駿氏「平安時代物語の研究」(昭30・6、東宝書房)
- (3) 拙稿「ある女の一生」(「萬葉・その後」犬養孝博士古稀記念論集)の方―(「萬葉・その後」犬養孝博士古稀記念論集)昭55・5、塙書房)
- (4) 拙著「あさちが露の研究」(昭49・6、桜楓社)
- (5) 小木喬氏「散逸物語の研究 平安鎌倉時代編」(昭48・

2. 笠間書院

- (6) 注(2) 参照。
- (7) 注(2) 参照。
- (8) 拙稿「物語『有明けの別れ』の内大臣」(昭55・12、「日本のことばと文芸」第二集)和泉書院)
- (9) 拙稿「『有明けの別れ』の女君―その人物造型をめぐって」(昭54・12、紫式部学会「源氏物語及び以後の物語研究と資料―古代文学論叢 第七輯」)
- (10) 注(2) 参照。
- (11) 注(5) 参照。

後記

「物語歌と物語歌集―「風葉和歌集」からみた物語在明の別」(上)は「南波浩先生古稀記念論文集(仮題)」(昭和五十七年三月刊行予定、笠間書院)に掲載した。また拙稿「物語歌と物語歌集―「風葉和歌集」からみた物語あさちが露」(昭56・12、「日本のことばと文芸」第三集)和泉書院)を併せ参照できれば幸甚である。